感染症発生動向調査委員会報告　9月

≪今月のトピックス≫

- **海外旅行によるデング熱の患者が5例報告されました。**
- **百日咳で、20歳以上の報告が目立ちます。**
- **O157等、腸管出血性大腸菌感染症の発生は減少しています。**

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：84か所、内科定点：55か所、眼科定点：15か所、性感染症定点：26か所、基幹（病院）定点：3か所の計183か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計139定点から報告されます。

平成19年8月20日から平成19年9月23日まで（平成19年第34週から第38週まで。ただし、性感染症については平成19年8月分）の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

平成19年　週－月日対照表

第34週	8月20～26日
第35週	8月27～9月2日
第36週	9月 3～ 9日
第37週	9月10～16日
第38週	9月17～23日

全数報告疾患

＜腸管出血性大腸菌感染症＞

毎年、夏に報告が多くなります。今年も、6月から報告が増え、7月は27例、8月は28例でしたが、9月は27日現在で3例に減少しています。しかし、全国では多く報告されており、注意が必要です。市内の発生例では、小児がレバ刺し、ユッケ等の生肉を摂取した例がありました。

予防対策の詳細については、以下をご覧ください。

「腸管出血性大腸菌感染症　O157に注意しましょう」（横浜市衛生研究所作成チラシ）
(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/o1572007.pdf)

腸管出血性大腸菌Q＆A（厚生労働省　2007年8月改訂）
(http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou19/index.html)

＜デング熱＞

第38週に5例の報告がありました。いずれも海外旅行での感染で、特に、アジアからの帰国者が目立っています。予防接種も予防薬もないため、蚊に刺されないようにすることが、唯一の予防法です。

詳しい情報は、横浜市感染症臨時情報「東南アジアで、デング熱に感染する人が増えています！」
(http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/2007nen/dengue.pdf)
をご覧ください。

＜レジオネラ症＞

8月も3例と、4月以降毎月報告があり、今年は現時点での合計が21例で、昨年までと比べて非常に増加しました。全国でも、第37週までの累計は440例と、かなり多くなっています。（表参照）

レジオネラ症については、平成15年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致死的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われます。

レジオネラ症の報告数の年別推移（2000年～2007年第37週）

	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年
全国	154	86	167	146	161	281	514	440
神奈川県	2	2	4	6	6	19	26	31
横浜市（再掲）	-	-	3	2	1	8	7	19

※ その他の疾患については、横浜市感染症発生動向調査全数情報をご覧ください。
（http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/infection_inf/report.html#zensu）

定点報告疾患

＜A群溶血性レンサ球菌咽頭炎＞

今年は、過去5年間と比べても一番高い値が続いていましたが、第34週には、例年並みの定点あたり0.30まで低下しました。その後少し増加し、第38週は、定点あたり0.49でした。全国では、第34週から増加が続き、過去5年間の同時期と比較してかなり多く、第37週は定点あたり0.84でした。例年、冬季にもピークが見られるので、今後の動向に注意が必要です。

＜感染性胃腸炎＞

毎年秋から冬にかけて流行します。今年は、6月以降、過去5年間と比べて高い値が続いています。全国では、第34週から増加が続き、過去5年間と比べて高くなっています。昨年は、非常に大きな流行がありましたし、冬にかけて増えていくので、立ち上がりの時期も含めて、動向に注意が必要です。

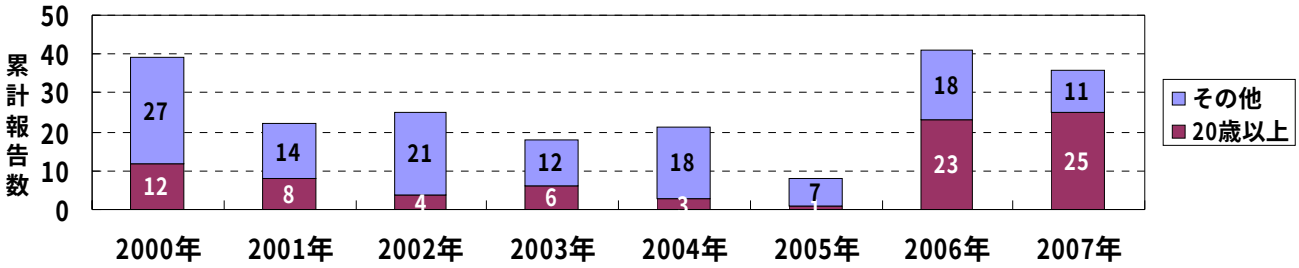
＜手足口病＞

例年、第28～29週にピークがありますが、横浜市では、昨年は秋に小さな山がありピークは第41週でした。今年は、7月中旬から8月中旬にかけて、昨年の秋程度の小さな山が見られ、ピークは第31週の定点あたり1.33でした。その後は減少していましたが、第37週から増加し、第38週は定点あたり0.70でした。全国でも、第35、36週は増加して高めになっており、今後も、動向には注意が必要です。

＜百日咳＞

今年は、第38週までで36人の報告があり、20歳以上が多くなっています。第34週～38週での報告を見ると、12人のうち6人が20歳以上、あとは1歳が1人、11ヶ月以下が5人でした。成人は、症状が典型的ではないために診断が見逃されやすく、感染源となって周囲へ感染を拡大してしまうこともあります。百日咳は、母体からの移行抗体が有効に働かないために、乳児早期から罹患する可能性があり、ことに生後6か月以下では重症化する危険性があるため、早めに予防接種を受けることをお勧めします。（三種混合ワクチンとして、生後3か月から接種できます。）

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2007年第38週)



＜麻しん＞

横浜市では、第22週の14人をピークに、麻しんの流行はほぼ終息しました。その後散発が見られましたが、第35週に15～19歳が1人報告された後は、0人が3週続いています。全国では、福岡、大阪など、9月に入っても報告数が多いところがあり、大阪では、9月中旬に臨時休校した高校があります。麻しんの流行は、春季から初夏にかけてが一般的ですが、秋季においても警戒を継続していく必要があります。

麻しんの予防接種については、単独ワクチンの1回接種から、2006年度より、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種に変わっています。横浜市の接種率は、第Ⅰ期が100％、第Ⅱ期が約80％です。麻しんの排除に向けては、Ⅰ期･Ⅱ期ともに高い接種率を維持していくことが必要です。

＜性感染症＞

性感染症は、診療科でみると産婦人科系（産婦）の11定点、および泌尿器科･皮膚科系（泌･皮）の15定点からの報告に基づいて集計されています。

8月の男女合計の定点あたり報告数は、性器クラミジア感染症と尖圭コンジローマで7月より増加し、性器ヘルペスウイルス感染症と淋菌感染症で7月より減少しました。また、昨年の8月と比べて増加していたのは、尖圭コンジローマだけでした。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点：8か所、インフルエンザ（内科）定点：5か所、眼科定点：1か所、基幹（病院）定点：3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

＜ウイルス検査＞

2007年9月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点28件（咽頭ぬぐい液）、基幹定点3件（髄液2件、咽頭ぬぐい液2件、便1件）、眼科定点3件（結膜ぬぐい液）でした。患者の臨床症状別内訳は、小児科定点は気道炎23人、ヘルパンギーナ2人、胃腸炎1人、口内炎1人、発熱のみ1人、基幹定点は無菌性髄膜炎2人、ウイルス性脳症の疑い1人、眼科定点は流行性角結膜炎3人でした。

10月10日現在、小児科定点のヘルパンギーナ患者1人の検体からコクサッキーウイルスB3型、気道炎患者1人の検体からアデノウイルス2型が分離されています。

これ以外に、PCR検査では、小児科定点の気道炎患者2人の検体からコクサッキーウイルスA2型、1人の検体からRSウイルス、ヘルパンギーナ患者1人と口内炎患者1人の検体からコクサッキーウイルスA10型の遺伝子が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

＜細菌検査＞

今月の受付はありませんでした。